

二つの葬送の物語——Jess Mowry 作 "Crusader Rabbit" と Charles D'Ambrosio 作 "Her Real Name"

田 中 育 造

はじめに

現代アメリカの小説家 Jay McInerney が編集し、1994年に Viking 社から出版した短篇集 *Cowboys, Indians and Commuters: The Penguin Book of New American Voices* は、1990年代に入ってから作品を発表しはじめたアメリカ作家たちの作品を 1 作家 1 篇ずつ、計 16 の作品をまとめたアンソロジーである。作品の選択は作家である編者の好みに従ったものであるが、いづれも、アメリカの「いま」⁽¹⁾を生きるさまざまな人たちの姿が描かれていて、その作品世界は実に多様である。

地理的にみると、最南部から東はニューヨーク、西はカリフォルニア州、ワシントン州とアメリカ全土にわたり、人種的には白人は言うにおよばず、先住民族、黒人、ヒスパニックが主役となっている。社会階層の面では中流家庭からスラム街の住人、ホームレスに至るまであらゆる階層の人びとが登場する。さらに、ことば遣いもリアルに再現されていて、まさに現代アメリカ人の縮図を見る思いがする。

叙述の仕方からみると、伝統的なリアリズムにのっとったものから、アメリカ短篇小説の書き手たちがこれまでに積み重ねてきたさまざまな実験の成果をうけついでものに至るまで、手法の見本ともいえる。

本稿は、その中から葬送にまつわる二つの物語、Jess Mowry 作 "Crusader Rabbit" と Charles D'Ambrosio 作 "Her Real Name" をとりあげ、その主題と構成ならびに手法の点から作品世界を見ようとするものである。

1. "Crusader Rabbit"

(1) 構 成

これは父と子の物語である。父と子の生成の物語である。都市の貧民街でごみあさりをして生活しているホームレスの男と行動をともにしている少年が、ごみの中にある「もの」を目にしてしまうが、その「もの」の「処理」の仕方を見て男を信頼し、男を父とするに至るまでの一日が描かれる。

この新しく形成された父と子の結びつきは血のつながりとは逆に子の主体的な選択によって成立する。親に捨てられたのであろう、ごみの中で死んでしまったかもしれない少年を救いだし、

When he'd first found Jeremy, the boy wouldn't have lived another week. (164)

しかも、恩きせがましいことは一切口にしない男のやさしさと謙虚さを少年は感知し、男に遠慮がちに父になってくれることを求めるのである。少年のせりふ "You could be my dad" で物語は始まり、"You gotta be my dad" を中間点にはさんで、"You are my dad, huh?" で終る。

(下線は筆者による) 仮定法から出発して直説法によって終結することで少年の気持ちの推移、つまり願望が確信にかわるさまが表現される。この絆の形成は二人の体型の相似によって暗示され

Raglan [男の名] could have been a larger copy on the boy, twice his age but looking it only in size (162)

最後の場面では同じ姿勢に固定化されて

Raglan stared into the flames...

Jeremy gazed into the fire. (168)

二人の一体化が完成したことを示し、物語は終結する。二人がともにナイキを履いているというほおえましい小道具まで用意される。

少年が男を信じ、父親になってほしいという気持ちを固めるきっかけとなる「もの」とはごみ缶の中に捨てられていた生まれたばかりの赤ん坊の死体である。少年はこの "the little honey-brown body, the tiny and perfect fingers and toes" (165) を見て強烈な衝撃を受ける。しかし男は少年に現実の状況を教える。

"They burn 'em, … (略) … The ones they find.

Other times they just get hauled to the dump an' the bulldozers bury 'em with the rest of the garbage." (165)

この言葉を聞いて少年は怒りのあまりナイフをしのばせたポケットに手を突っこむ。

The boy's chest heaved, muscles standing out stark. His hand poised.(165)

男はこの純真な反応に接して「もの」の「処理」ではない、死体を人間として埋葬することを心に決める。

ここまでがこの物語の前半である。この小説は、死体を埋葬するまでを描く後半部と二つの部分から構成されていて、この二つの部分はきわだったコントラストをなす。

(2) 手 法

次に二つの対照的なムードをつくりだしている要素をとりだしてみる。

① 都市—自然 (田園・海)

男と少年はトラックの中で生活しているのだが、それにキャンバスにくるんだ死体を乗せて、市街地を離れる。まちなかは

Traffic rumbled past the alley. Exhaust fumes drifted in from the street. (164)

であったが、田舎道に入ると、あたり一面野の花で、道の真中にまで黄色いタンポポが咲いている。道のわきでは小川が岩を噛んで流れ下る。道は丘の上で終り、そこは

A hundred feet ahead a cliff dropped off sheer to the sea. Big waves boomed and echoed on rocks somewhere below, sending up silver streams of spray.(167)

くるまの騒音はとどろく波の音に、排気ガスは銀色の波しぶきにかわっている。

② 低—高

オークランドの下町を出て田舎道に入ったトラックはやがてのぼり道にさしかかる。

They rolled slowly to the hills in third gear. (167)

the truck took the grade growling in second. The road got fainter as it climbed, then finally just ended at the top of the hills. (167)
二人が到達したのは、大海原を一望に見はるかす切り立った崖の上である。

③ 暗→明

物語は夕方から夜へと進むのであるから、あたりは次第に暗くなるのではあるが、二人をとりまく二つの異なる空間の明るさはその逆の印象を与える。街中で少年はごみ缶の中に入り込んで、両腕をひじのところまでヌルヌルにしてごみをあさるし、休憩のときには男の所有物が一杯つまったトラックの中に入りこむ。どちらも暗いイメージがつきまとう。加えて、車を止めてある街角は日光が "stabbing down between the buildings" (166) しているだけなのである。それに対して、埋葬を終えたとき二人がいるところでは

Far out on the water, the sun grew huge and ruddy as it sank
(168)

と、沈みゆく太陽ではあるが、光をさえぎるものは何もなく、あたりは暗いとは決して言えない。

④ 酷暑→清涼

二人がごみをあさるところは、

The Oakland morning fog had burned off hours before, leaving
the alley to bake in tar-and-rot smell (162)

[The boy's] wiry, dusk-colored body glistened with sweat
(161)

汚臭のこもった炎熱が弥漫しているが、街を離れると緑の丘がのび、溪流が走り、波しぶきが飛ぶ。それまでの "the hot, dead air" (164) にかわって

The air was fresh and clean, scented with things that lived and
grew (166)

となる。埋葬のために土を掘ると "the earth-scent" がまわりの空気を包む。

⑤ 閉塞→開放

少年と男が歩きまわる街は建物が密集し、よどんだ空気には排気ガス

が充滿している。ごみ缶一トラック一街角と視点を引いていっても閉塞の状況は一向に変わらない。しかし、国道から田舎道に入るとそこは
an open countryside of gentle green hills now spread out around them. (166)

道が果てたところは丘の頂上で、車をおりて二人は歩く。

The ground rose again nearby to a point that looked out over the ocean. They climbed to the top. (167)

閉ざされていた空間は広大なひろがりへと様相を一変する。

⑥ 汚濁—清浄

ごみをあさる少年の両腕は “slimed to the elbows from burrowing” (161) であり、水に濡れた海獣の毛のようにヌルヌルしている。あたり一面

the stink seemed to surround him like a bronze-green cloud, wavering upward like the heat-ghosts from other dumpster lids along the narrow alley (161)

ハエが雲のように群がり、ネズミが目の前を急ぐ様子もなく横切って行く。この汚濁の世界を出た少年は波の飛沫を浴び、汚れた衣服を脱ぎ、海と太陽に裸身をさらす。

The boy spread his arms wide for a moment, his head thrown back. Then he looked down at his dirty jeans. (略) the boy stripped to stand naked before the sea and the sun. (167)

“glistened with sweat” だった体は今は “glistened with sea spray” となる。こうして汚れは清められ、少年は再び “a beautiful kid” の姿をとりもどす。清浄になった体で少年は小さな塚に野の花を供えて埋葬を終える。大自然の中、かぐわしい土 (earth) の上で、大海原 (water) を眼下に見おろすところに焚火 (fire) をたき、汚れのない空気 (air) に包まれて二人は座っている。やがて少年は物語をしめくくることば “You are my dad, heh?” を発することになる。

(3) 主 題

以上見てきたように、この小説は、ごみとして捨てられていた赤ん坊の死体を、人間として葬るという行為を通して、ごみに埋もれ、ごみの

一部のようになっていた少年が人間として再生する物語である。その再生には「父」が必要であった。その役割を男が果たす。男は終始少年を見るともなしに見守っているというふうに描かれる。表情を消し、黒衣くろこに徹してはいるものの、薬物中毒から抜け出そうとする少年の介護をする「癒す人」でもある。男と、男に父になってもらいたいと思うほどに人間を信頼することができるようになった少年が作り出す新しい家族像に、現代社会における人間関係の一つの可能性を作者は見ているように思われる。

登場人物について次の二点を付け加えておきたい。

- ① 赤ん坊は生まれると同時にごみのように捨てられ、13歳の Jeremy 少年には母親の姿はみあたらず、男には妻はいないようである。この物語には女性のかげはまったく無い。
- ② 次の描写

Jeremy followed, his moves flowing smooth like a black kid's once more. (164)

から少年が黒人であることがわかる。他にも "and hair like an ebony dandelion puff" (161) とか "His eyes were bright obsidian" (161) と、黒人の身体的特徴としてあげられるものがある。男については、この点について判断できる描写は見当たらないが、捨てられていた赤ん坊の死体は "the little honey-brown body" (165) となっている。死んで変色したとも考えられるものの、この色は黒人の血が混じっているか、ヒスパニックと考えられないこともない。もしそうであるならば、きびしい現実がアメリカ社会での弱者である黒人やヒスパニック系の人々に集中し、人間の中で最も脆弱な存在である赤ん坊が社会の矛盾の犠牲になるという図式として読みとることができるだろう。

(4) 題名について

題名になっている *Crusader Rabbit* については二カ所で言及されている。一つは前半部分で、男が本名ではない Raglan という名を使っているわけを少年に聞かれて答えるところで、

My dad started calling me that. S'pose to be from some old-

time cartoon, when he was just a little kid. *Crusader Rabbit*.⁽²⁾
But I never seen it. The rabbit's homey was a tiger. Raglan
T. Tiger. (163)

もう一つは後半部、この物語の終り近くで、二人の会話に出てくる。

"So, You never seen that Crusader Rabbit. Don't know what he
looked like?"

"I think he carried a sword, an fought dragons." (168)

少年にとっての奪還すべき聖地は信頼することのできる人間であり、庇護してくれる「父」である。ウサギの十字軍兵士である少年を掩護する剣士がその名の示す通り男である。更に

There was an old knife slash on his chest; a deep one, with a
high ridge of scar. (162)

と、男の胸にはっきりと残っている古い刀痕によってもあらわされる。

2. "Her Real Name"

(1) 構 成

この作品も葬儀が物語をしめくくる。しかし、ここではそれがある事柄の終りでではなく、前作のように、それに関わる人間に何らかの肯定的意味をもたらすものではないように見える。ではこの作品における葬儀のもつ意味は何であろうか。

アメリカ大陸を西に向かってひたすら車を走らせている男が途中で、家出少女を同乗させる。この少女は不治の病にかかっている。事情を知った男は、少女の希望にそって名所旧蹟にたち寄りながら走り続けているうちに、少女の容態が悪化し、最北部の州に入ったところで死んでしまう。男は少女のなきがらを沖合まで運び水葬する、というのが物語である。

全体は旅の道中、少女の死、葬送の三章から構成されていて、各章ごとに基調となる要素が与えられている。まとめると次のようになる。

I 章	動 (水平方向と時間)	火の元素
II 章	静	水の元素
III 章	動 (垂直方向)	水と火の元素

以下でくわしく見ていきたい。

(2) 手 法

第 I 章は Illinois 州 Carbondale から Washington 州 Wenatchee に至るまでの旅の道中が描かれる。男の話から、男が海軍を除隊し、Virginia 州 New Port News から Carbondale まで旅をしてきたことがわかる。海上から Virginia へ、そこから陸上を Washington 州へというこの道筋は、アメリカ合州国の歴史がたどった道程と重なっている。加えて、二人が途中立ち寄るのが Mt. Rushmore の the Parade of Presidents, "America's Heritage in Wax", The Valley of Little Big Horn 等々の名所旧蹟であり、the Lewis and Clark Trail を越えて Washington 州に達するのであるから、まさに、アメリカ合州国を空間と時間の両方で移動したことになる。この章を占めるモードは「動」であり、それは水平方向と時間軸にそったものである。

二人は真夏の炎天下を旅する。

it was getting hotter as they drove west, heading into a summer-long drought that scorched the landscape, that withered the grass and melted the black tar between expansion joints in the road and broated like balloons the bodies of raccoon and deer and dog (27)

Endless fields, afire in the bright sun (29)

少女の頭髪は薬の副作用で抜け落ちていて、その様子は

The girl's scalp looked as though it had been singed by fire (27) であり、"I'm burning alive" (30) と少女は言う。この章を支配するのは暑さであり、渴きであり、火のイメージが用いられる。

第 II 章は旅はなく、Seattle に近いまちでの午後から翌朝にかけてのことに限定され、少女の死までが描かれる。死に瀕した少女は、髪は抜

け落ち、歯は1本抜けてしまい、眼は充血し、手足は骸骨のように痩せ衰えている。18歳なのに80歳の老婆と見紛うばかりで、

She'd said she was eighteen, but now she could have passed for eighty (50)

まるで、西へ進むアメリカ開拓の歴史の時間を実際に生きてきたかのようである。

一つの生命の終りを描くこの章では、死を予告する場面が用意される。嘔吐で汚れた少女の体を男が拭いているとき

The curtains fluttered, parting like wings and rising into the room (44)

この描写は天からの告知者の到来と読みとることができる。時は the sun was setting in the valley, the brown rim of hills holding a halo of bright light, on emphatic, contoured seam of gold 生命の終焉の時と重ねることができる。

この章では水が中心的な要素として用いられ、浄めの役割を果たす。夜になって、男が熱の出た少女を抱いてモーテルのプールの水に浸す場面がこの章のハイライトになる。背中が水面に接すると

She let her arms spread wide and float on the surface as Jones [男の名] eased her toward the edge of the pool (49)

水に入る前の少女の体は

Against his fingers, her skin felt dry and powdery, friable, as if the next breeze might blow it all away, and he'd be left holding a skeleton (48)

であったが、水に漬かると

Her skin seemed to soak in water, drink it up like a dehydrated sponge, and she felt heavier, more substantial. Her arms and legs grew supple, rising and falling in rhythm to the water (49) 少女を苦しめていた火の元素は、水の元素によって滅び、少女は水と同化する。このことが次の第Ⅲ章への前触れとなる。

第Ⅲ章は再び「動」にもどる。男は少女の亡骸を車に乗せて、比較的新しく州になったアラスカを別にすれば、合州国最西端の地である Cape Flattery の、さらに先端のところまでやってくる。ここから、ク

ルーザーに搭載してある救命ボートを無断でもち出して沖へ出る。ひんやりとした夜風の中で波しぶきを浴びながら、男は用意してきた寝袋の中に遺体を入れて海中におろす。折から近くの山では野火が延焼中で、強い西風にあおられた炎が天に向かって燃えあがる。

この章での「動」は水平方向に次いで垂直方向の動きが続く。寝袋に懐中電灯が結びつけられて、光が沈んで行くのが見え、

Down she swirled, a trail of light spinning through a sea that showed green in the weakening beam and then went black. (58)
それとは逆の方向に星のあかり海面から立ち昇るようにきらめき、
a spray of stars that flashed like phosphorescence, rising out of water (57)

山は火を吹きあげている。

a prevailing westerly had blown the wildfire across its crown, and a flare of red-yellow flame swept into the sky. (58)

第Ⅱ章で沐浴を済ませた少女は、海底に沈んでゆっくりと水の元素に還元されることになるであろう。少女を噴んでいた火は昇天する少女の霊を導くように天への道を照らす光となっている。このようにこの章での元素は水と火であるが、それに土と風の元素も加えられる。男は、アメリカ合州国の年齢と同じ200年の年輪をしるす木の切株のまわりから土を掬って持ってきていて、それを遺体の入った寝袋の中に撒き、水葬は海上を吹き渡る冷たい風の中で行われるのである。こうして四つの元素がすべて出揃って小説は完結する。

(3) 主題及び題名について

この小説の主題について考えるときに、題名の持つ意味を探ることが手掛かりとなる。では、Her real nameは何であったのか。男にはJonesという名が与えられているが、少女の名前は1度も示されない。しかし、男は知っていたはずである。それは、少女がa family treeが書いてある聖書を開いて

"That's me," the girl had said, showing Jones her name (28)

と言っているし、水葬の直前に男はその聖書に没年月を記入して遺体に副えるからである。

He'd taken the Bible, opened it to the genealogy, and scratched the month and year into the margins (58)

では何故作者は少女の名前を出さないのか。二つのことが考えられる。

一つは、名を明かさないことによってこの少女の存在を特定の個人に限定してしまわないためである。少女のおかれた状況は単にこの少女個人に限ったことではなく、だれにでも起こりうることなのだといふのである。名前が示されないことによって普遍性が付与されることになる。

第二点。少女が辿った道筋がアメリカの歴史が進んだ方向と重なること、少女が旅の途中で由緒ある土地にさしかかる度毎に記念品を買い、
the bumper stickers from Indian battles, and decals commemorating the footpaths and wagon trails of explorers and pioneers, the resting places of men and women who'd left their names to towns and maps. (58)

死後男はそれらすべてを副葬すること、18歳の少女が死ぬときには80歳の老婆のような姿であったと描写すること、と並べてみると、少女がアメリカそのもの、アメリカの化身に見えてくる。つまり、Her real name は America ではないのか、少女はアメリカの歴史の経過を早送りで辿ったのではないのか、と解釈することができそうである。

一方、葬儀を終えた男については、車の走行距離計が表示する数字が 999 999から000 000になる

The numbers changed, and mile one was history. (54)

という表現によって、空間と時間両面での一つの旅を終え、アメリカのフロンティアラインの最終地点から新たな出発をすることを暗示する。

現在の病めるアメリカを、再生の願いを込めて大自然の中に葬り、再出発の途につくということを主題として読みとることができるのである。

おわりに

死者たちが帰り行くところは、都市の汚濁の中で死んだ者には清浄な自然にとり囲まれた土の中でなければならず、炎天下に高熱を発して死んだ少女の体は清涼な夜風が吹き渡る北の海の底でなければならなかった筈だ。そのような場所で亡骸はゆっくりと地球の元素に還元されて行

くのである。一方、地上に生き残る人たちは、葬送を経て、あるいは新たに信頼による絆によって結ばれ、あるいは次の新たなる出発をする。ここに人間として生き続けるための可能性を模索する人々の姿を見ることができる。

【注】

- (1) *The Penguin Book of New American Voices*. edited by Jay Mc Inerney. Penguin Books, 1995, p.xxii.

"The final criterion for selection was simply the personal taste of a professional writer and amateur reader."

以下、作品からの引用はこの版により、引用の末尾のかっこ内にページ数を示す。

- (2) Shown in Fall 1949. Produced in San Francisco and Los Angeles by Jay Ward and Alexander Anderson.

A series of very brief episodes (four minutes each), it tells of the Round-Table-like adventures of Crusader Rabbit and his friend Ragland T. Tiger.

Giannaberto Bendazzi, *Cartoons: One Hundred Years of Cinema Animations*. Bloomington: Indiana University Press, 1994, p.234.